



MACBETH

BY

WILLIAM SHAKESPEARE

WITH INTRODUCTION AND NOTES

TOKYO

KENKYUSHA

1925



KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書



大正十四年二月十五日 印 刷 大正十四年二月二十日 發 行

主 幹 者 岡 倉 由 三 郎

主 幹 者 市 河 三 喜

發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎

東京市麹町區富士見町六丁目七番地

印 刷 所 研 究 社 印 刷 所

東京市麹町區飯田町六丁目一番地

發 行 所 研 究 社

東京市麹町區富士見町六丁目七番地

電話 四谷二九五番

振替口座東京二八六〇一番



非 賣 品



(芝赤羽橋 新榮社製本)

は し が き

本叢書第三輯に Shakespeare の *Macbeth* と *Othello* を入れることにした。今迄に出て居る *Hamlet* と *King Lear* を併せて Shakespeare の所謂「四大悲劇」が完成される譯である。本輯に於ては Introduction に著者の略傳と年表を繰返す代りに、劇の梗概とほかに一つ Shakespeare の研究に必要な事柄について記述することにしたが、差當り本書には Shakespeare 時代の劇場に関する單簡な説明を試みた。Shakespeare の劇を充分に味ふにはその演ぜられた舞臺の構造や上場の様様なを一通り心得て置くことが極めて肝要である。

本篇は嘗て研究社から單獨に出した *Macbeth* に據る處多きも其中に見出さるゝ誤謬は之を訂正し、註者最近の知識によつて書き換へた積りである。随つて今迄の *Macbeth* は此機會に絶版にすることとする。

次に巻頭の口繪は New York の Central Park に 1872 年に建てられた銅像で彫刻家 J. Q. A. Ward の作に成り、Shakespeare の銅像としてはよく出来て居るものである。右手に読みかけの本を持ち何か考へに耽つて居るさまである。服裝はエリザベス時代の男の普通の装ひで、上着の doublet と細いズボンの hose を着け、左の肩から cloak をかけて居る。

大正十四年二月十日

市 河 三 喜

CONTENTS

INTRODUCTION

	PAGE
I. "MACBETH"	i
II. SHAKESPEARE 時代の劇場に就いて	vii

MACBETH

ACT I	3
„ II	23
„ III	39
„ IV	59
„ V	80

NOTES.	99
----------------	----

INDEX TO NOTES	171
--------------------------	-----

INTRODUCTION

I. "MACBETH"

Macbeth の書かれたのは判然しないが 1603-1610 年の間であることは疑ひないやうである。1603 年は James 一世が即位された年であるがその頃書き始めたものであらう。劇中 James 一世が Scotland 及び England の兩王冠を戴くことに言ひ及んで居る箇所がある (cf. IV. i. 120-1)。それから有名なエリザベス朝の醫師 Simon Forman さいふ人の日記に 1610 年四月二十日 Globe 座にて *Macbeth* を見る、さいふ事が書かれて居るから無論それより後の作ではあり得ない。世に出たのは 1623 年の First Folio (Shakespeare 全集の初版) が初めである。

劇の材料は主として Holinshed の *Chronicle of Scottish History* (1586-7) から取つたものであるが第四幕の子供の Apparition の出る處さ、第五幕の Lady Macbeth の夢遊病に冒される處さは Shakespeare の獨創である。因に歴史上の Macbeth は 1040-57 年にスコットランドの王であつた人物で、Duncan を弑して王位に即いた事は事實であるが、その治世は極めて安泰隆昌であつたと云ふ。

〔梗概〕 漠々たる原頭、雷鳴電光おそろおそろしき中に三人の妖婆が現はれて、マクベス將軍の凱陣を見計らひ、荒野に之を擁さうと打合せをする。(一幕一場)

フォリスに近きダンカン王の陣營では、刻々齎らされる戦況が皆マクベス將軍の殊勳を報ずる。叛將マクドナルドも退治された、其機に入寇したノルウェー王も、之に呼應したコードー侯も敢

なく撃破せられたと、悉く味方にまつての吉報である。(一幕二場)

薔の妖婆共はフリスに程近い荒野に出で、マクベスをコード一侯、又、王位に上るべきものと呼び、其伴へるバンクー將軍を王を生むものと稱へ、奇怪な豫言をなして消失せる。怪訝の思をなせるマクベスの許へは、早くもダンカン王の優渥な御説をコード一侯の爵位を齎らして、勅使が来るので、半信半疑の内にいつしか王位に對する邪慾が萌して来る。(一幕三場)

フリスの宮廷に到着した二將軍は王の手厚い懐(き)ひに迎へられて非常な面目を施す。王はこの歡びの中に長子マルコムを世嗣と定むる旨を宣し、尙これからインヴァネスなるマクベス邸へ臨幸の饒を仰せ出されるので、マクベスは先づ闕下を辭して歸城を急ぐ。(一幕四場)

マクベスの居城では、夫の便りを讀んで妖巫の言に野望の炎を燃やしてゐる夫人の許へ、急使が行幸を傳へて来るので、此機に夫をして弑逆を果さしめんと怖しい工みをする。先發のマクベスも歸着した。一夜の御滯留を聞いて、是が非でも此夜の中に腹をきめる。(一幕五場)

王は繼嗣と次王子、バンクー其他の供奉を從へ御成りになり、皆さりざりに爽かな風光を賞でる。夫人もさあらぬ態で御迎へをする。(一幕六場)

やがて饗宴も酣なる時、マクベスは獨り席を離れて別室に現はれる。心剛なれど、決意に弱く、非望は抱けど横道を厭ふ彼は逡巡煩悶して將に逆意を醸さんとする。彼の心弱さを卑怯と罵り、決行を激勵するのはその夫人である。彼等は侍臣等を盛りつぶし、弑逆の科(罰)をそれに塗りつけようと圖る。かくてマクベスも斷行の膽を固める。(一幕七場)

眞夜中も過ぎて月は落した。未だ寢やらぬバンクーは炬火を捧けた我子と共に中庭を通ると、一僕を從へたマクベスに出會ふ。

彼は王の優渥と夥しい下賜が夫人や家臣にあつたことを傳へて別れる。突如マクベスは暗中に幻影を見る。それは抜き放たれた短剣で、櫛(3)は我が方へ、恰かも兇行へ我を導くが如く見える。すると斑々たる血痕まで歴々そ浮び出る。やがて合圖のベルが鳴る。早や夫人は御寢の間に忍びこみ、逆事の仕度を終つたのである。(二幕一場)

梟の叫聲と蟋蟀の鳴く音の斷續する黑暗々裡に、首尾は如何にさ夫人は昂奮を以て待ち受けてゐる。さマクベスの姿が現はれる。血に塗れた短剣は果然弑逆の行はれたことを物語る。然し夫は早くも良心の呵責に訶(4)まれ、何處さもなく「汝は安眠を殺せるぞ」と嚴かな聲を聞いたほど、又寢怯えて祈禱する侍臣の言葉にアーメンと應へられなくなつたほど、喪心して現なき有様なので、夫人が代つて取つて返へし眠りしれたる侍臣に血を塗り、下手人らしく取繕らふ。かくて夫を促し寢衣に更めようさ勸めてゐるさ、途端に彼方に戸を叩く音が起る。疵もつ彼等を悸死せしめるが如く、此世の理法の儼存を連呼するが如く、沈黙の世界を破つて鳴りしきる。(二幕二場)

戸を連打されて、未だ醉眼のさめきらぬ門番が地獄の門衛もどきの惡たれ口の後、起き出でて見るさ、マクダフミレノックスさが豫ての命によつて早朝王の許へ來たのである。斯くて兇事は發見された。城内は鼎の如き大騒動となる。マクベス激怒を裝ひ血に染んだ侍臣を下手人として斬り捨てる。前後策の相談に皆々廣間へ急ぐ間に、二王子は後難を恐れ出奔する。(二幕三場)

偶々二王子の失踪は弑逆に對する嫌疑を強めることとなり、王位はマクベスに繼承せらるることとなつた。然しマクダフ等は其許を去つて己が居館に歸つた。(二幕四場)

バンクスー將軍は智勇に秀づるのみならず、妖婆の言の的中に王位篡奪の内情を察知せるらしく、且は王統の始祖たるべき豫言

もあり、マクベスは彼を一大勁敵として心中窺かに懼れてゐるが、さあらぬ體に饗宴の主賓として宮廷に招く。バンクォーは其刻までにさる急用のため我子を従へ、城を辭する。マクベスは此機を逸せず、豫て手なづけて置いた刺客を煽動して其歸路を襲うて父子を斃さしめんと謀る。(三幕一場)

罪の呵責に日夜懊惱してゐるマクベス夫妻は、空位を擁する果敢なさ、外面は何氣なく取繕はねはならぬ焦かしさに、寧ろ泉下に眠る故王を羨む。然し今宵の宴にもさる心遣ひを怠らぬやう互に戒めあふ。(三幕二場)

刺客は夕闇に 乗じバンクォー父子を襲撃して、遂に父を殺したがフリーアンスは逸した。これまで思ふ壺にはまつて進行して來たマクベスの計畫は次第に齟齬し、歩一歩破滅の淵に陥る。(三幕三場)

饗宴の刻となつた。すると刺客の一人が戸口に忍んで來て委細の報告をする。やがて挨拶を終り着席しようとするを、不思議やマクベスの眼にはバンクォーの亡靈がわが座に着いてゐるのが見える。あらぬことを口走る王のたたらぬ様に一同怪訝の眼を見張る。王妃がさあらぬ體に取りなせど王の物狂しきは募るばかりで、遂に折角の催しも散々の態で果てゝしまふ。惱亂のあまり今は邪道も顧みるところでないを、マクベスは進んで妖巫を訪づれ、其啓示を受けんと決心した。(三幕四場)

一方妖巫の頭目ヘカトが此度は自らマクベスを迎へ、彼を一層の惑亂に投ぜんものと手ぐすね引いて待つてゐる。(三幕五場)

マクベスの暴狀は日毎に募り、邪淫、讒計、殺戮、あらゆる罪科に心中の悶々を紛らす。先に饗宴の召に應じなかつたマクダフは王子の跡を追うて、英王エドワードの廷へ走つた。マクベスの廷臣等も専ら其噂をなし、早く暴王の惡逆から免れたいと祈つてゐる。(三幕六場)

マクベスは果して妖婆等を訪づれた。陰々たる洞窟の中央には
煮え沸きる大釜を繞つて、呪文を稱へ、怪しき妖藥を調じつゝあつ
たが、彼等は三の幻影を示す。先づ兜を鎧うた頭が現はれて、「マ
クダフに油斷すな」といふ。次には血だらけの幼児が出て来て
「女の腹から産まれたものはマクベスの身を危うすることなし」
といふ。最後に王冠を戴いた幼児の姿が現じて、「バーナムの森が
動き出してダンシネインの丘に来る迄はマクベスの身は安泰な
り」と豫言する。マクベスは果してバンクォーの裔が王位を繼ぐで
あらうかと尋ねる。彼等は容易に此一大事は明かさなかつたが、遂
に其乞を容れて幻影を見せる。それは八人の王の行列で、バンクォ
ーの亡霊が其殿りをなしてゐた。マクベスは失望と怒に燃えてゐ
る。そこへ廷臣がマクダフの失踪を報告する、愈々捨鉢になつ
てマクダフの妻子一族を屠れと命令する。(四幕一場)

マクダフ夫人は、妻子の危難を顧みず他郷に走つた夫の無情を
一途にかこつ。従兄弟のロッシが頻りに之を慰めるが、唯頑是な
い子息を擁して悲嘆に沈むのみである。折しも遽しく危急の報が
至る、其間もあらせず、早や我が兒は毒手に斃され、夫人は悲鳴を
あげつゝ追はれ行く。(四幕二場)

マクダフは英王の許に難を避けてゐる王子マルコムを尋ね、亂
麻の如き國情を訴へ、其舉兵を切願するが、マクダフに心を許さ
ぬか、わが惡徳にこそよせ、其器でないとはかり容易に肯はない。
然し赤誠は遂に徹した。王子は既に英王の援助により叔父シーワ
ードが一萬の軍を引率し、早出發の手筈になつてゐることを打明
ける。此時ロッシの到着によつて、故國の慘狀、妻子の遭難が知
れるので、且は嘆き、且は怒り、手づからマクベスを屠らんもの
と誓ふ。それより一同英王に謁して直ちに出陣をなさんとする。
(四幕三場)

ダンシネイン城内はマクベスの出征にかへて、加へて、夫人の奇

怪な病(狂)で、一入陰森の氣が漂ふ。侍女と侍醫とが其噂をしてゐる溜の間へ、夫人は夢遊病の發作で入り来る。闇を求めた彼女は今や暗きを恐れ燭を放さない。流血の慘事に自若としてゐた彼女は今や血に染む我が手を清めんと焦せるが、如何にしても腥き汚點が除れぬかの様子、其現なき言葉は、己が非望に斃れたダンカン王やバンクス、扱はマクベス夫人の上を口はしるのみである(五幕一場)

王子を戴く英軍はバーナムの森の方へ進軍する、マクベスは飽くまでダンシネインの城を固め、決死の防備をなさんとしてゐる。然し其手兵は反逆の機を窺ひつゝある氣配著しく、投降者は續々バーナムの森を指して急ぐ。(五幕二場)

マクベス軍の形勢は悉く非である。マクベスは今や一切の報告に耳を傾けず。只管妖婆の言を頼みに、勇氣を奮つて最後の戦を試みんとする。(五幕三場)

バーナムの森の邊まで押し寄せた攻撃軍はマルコムの方により、各樹枝を翳して兵數を隠しつゝ進撃する。(五幕四場)

城内では敵に投降するものが相次ぐので、突出を斷念し、城を固めることに専念してゐる。折柄夫人の自殺が報ぜられる。續いてバーナムの森が此方へ動き出したといふので、流石のマクベスも妖婆に誑かされ、大事を誤つたことを痛感する。(五幕五場)

早や城門間近く敵は迫つて、樹枝を擲ち二手に分かれ、耳を劈く喇叭の音と共に戦を始める。(五幕六場)

窮地に陥つたマクベスは尙も「女の腹から産まれたものは恐るるに足らず」その言を頼みに獅子奮迅の勢で荒れ狂ひ、小シーワードを殺した。マクダフは妻子の仇敵に渡り合はんものと亂軍の内を探がし求める。マクベス軍の多くは戦意なく隨所に同志討さへ演ずるので難なく城は陷落する。(五幕七場)

マクダフは遂にマクベスに會した。妖巫の言を頼んで豪語する

マクベスは彼が月満たざるに、母胎を切り破つて生に導き入れられたことを聞き俄に戦ふ氣さへ挫けたが、遂にマクダフに首級を擧けられた。小シーワードの死、暴王の自滅、悲喜交々至る中に、マルコムを迎へる歡呼が妖雲を拂うて轟き渡る。(五幕八場)

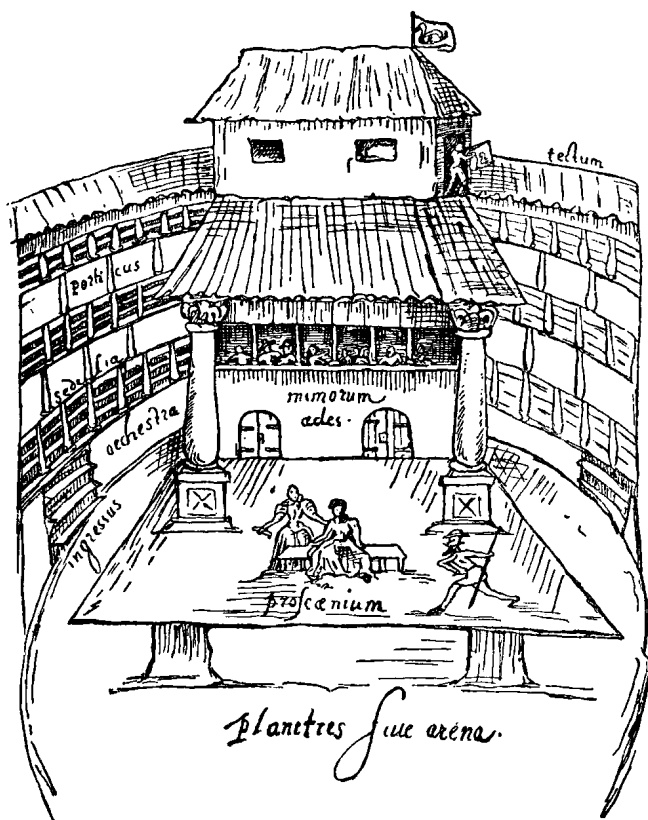
II. SHAKESPEARE 時代の劇場に就いて

Shakespeare 劇は當時の劇場構造と切り離す可からざる關係のあるもので、其特異な性質は所謂 'apron theatre' (張出舞臺) が齎らした必然の結果であつた。現代の 'curtain theatre' で Shakespeare 劇の演出を企てることは不自然であると共に、沙翁の偉大の一面も或程度まで此種の劇場の所産たることは否み難いところである。其嚆矢をなすものは 1576 年の The Theatre であつて、これがエリザベス朝最初の公開劇場であつた。爾後續々起工せられ 1633 年には倫敦中に十九の劇場が存在してゐたと傳へられてゐるのでも當時觀劇熱の旺盛であつたことが推し量られる。然し Civil War の初年には最早劇場としての使用を禁じられ居た上に、1666 年の倫敦大火で悉皆烏有に歸してしまつたから、apron theatre の生命は前後五十餘年で終熄し、王政復古 (Restoration) 後は大陸の影響を蒙つた curtain theatre の時代となつたのである。

當時の公開劇場は倫敦市の管轄内には建築を許されなかつたので、觀客吸収に便宜な最も近い郊外の地點に設けられた。The Theatre は Curtain 座と共に Bishopsgate の外側 Shoreditch に、Cripplegate の外側には Fortune 座が現はれ、Ludgate 附近には形式の異つた劇場ではあるが Blackfriars 座が出來、Thames 對岸には Rose 座を始め、The Theatre の後身 Globe 座や、Swan 座、Hope 座が建てられた。1620 年以後は劇の中心地は Ludgate 及び Drury Lane 附近に移つた。此時代の劇場は孰れも木造建築で、草

葺が多いので防火の必要上、又風紀の點や、當時の狹隘な街衢では雜沓のために商店が迷惑を被むる懼れや、倫敦市對宮廷の關係等の種々な原因から、劇場は市内から驅逐せられたものらしい。市中に興行の場合には特別な認可を得た上に、上り高の一部を市から徴收せられることになつてゐた。

構造から云ふと、圓形又はそれに近い六角形八角形或は方形の輪廓をもつた木造建築であつて、二段若くは三段の棧敷（‘scaffolds’）が舞臺に對する三方を繞る、時には舞臺側の一部にも延びる、そして棧敷には座列が設けられ、中央の土間（‘yard’）は屋根のない露天の儘で立見席としてある、舞臺は此種の劇場の著しい特色をなすもので、高さ四五呎、土間の中央まで張り出し、全然觀客に圍繞せられた儘で演技をするやうにしつらへられた。舞臺には幕の設備が無く開放せられた儘で、後方の奥舞臺（‘inner stage’）と帳により仕切られ、其兩側に屏が造られてゐる。奥舞臺の上方は gallery をなし、屏の上にも窓或は balcony が設けられた。舞臺の前方には二本の柱が片庇屋根を支へてゐることが多い。gallery の上方に更に ‘Heavens’ と稱せられた一層を備へる場合もある、これには宙乗りの仕掛などの裝置が設けられたのである。又其頂上には興行中の目印に旗を樹てたり、毎日開演に先たつてそこで喇叭を吹く習慣になつてゐた。奥舞臺の左右及び後方は樂屋（‘tiring-room’）となつてゐた。此時代の劇場内部を畫いたものとしては和蘭の學者 Jan de Witt が 1596 年に描いた Swan 座のスケッチが唯一のものである。それによると劇場は卵圓形をなし、奥舞臺を缺き、上方の gallery が其用をも兼ねてゐたらしい、そして gallery は見物席としても用ひられたやうで、其畫に表はされてゐるのは明かに觀客である、我が江戸劇場の羅漢臺と稱せられる見物席に酷似してゐる。



The Swan Theatre

tectum = roof. porticus = gallery. sedilia = seats. ingressus = entrance. mimorum aedes = actors' rooms (i.e. 'tiring-room'). proscenium = fore stage. planities sive arena = level ground or yard.

観劇料は入口で拂ひ、特殊の座席を選ぶ場合には box-holder 又は gatherer に更に其上料金を渡すことになつてゐた。土間は最も低廉で通常一片で、所謂 groundlings が茲で立見をする、二片席さいふのは最上方の棧敷であつたらしく、下方の棧敷は六片から一 crown、最も上等の席は gentlemen's rooms と稱せられたものであつた。然し gallant 連は樂屋を通り抜けて舞臺の一隅に床几を置いて見物するのを普通とした、これには六片から一志の料金を徴したものでらしい。

Shakespeare 劇の劇場で最も注目すべきことは舞臺に幕や背景の道具立を缺如した點である、此等に関するトガキ ('stage direction') の残つてゐないことは著しい事實であつて、これが Shakespeare 劇の性質に根本的な影響を與へたことは後段に述べる通りである。

エリザベス朝の演劇には種々の民間藝術が攝取せられて其要素をなしてゐる。中世寺院から脈を引いてゐる Mysteries, Moralities, Interludes は勿論 street pageants, sword-combats, wit-combats, bull-baiting, bear-baiting の如き大道藝、見世物、催し物、興行物が幾分づつ採り入れられてゐたが、なほ劇場構造にもそれ等の残した痕跡を指摘することが出来る。例へば劇場の外形が圓形若くはそれに近い八角形、六角形であることは bull-baiting, bear-baiting の小屋になつたもので、實際劇場をそれ等の rings として使用したこともある。劇場内部の配置は従來臨時に劇場として用ひられた inn-yard をそのまゝに踏襲したものである。露天の中庭に急造の舞臺が設けられた場合に、其廊下や中庭が直ちに観客席となる趣は Fortune 座の如き方形の劇場と全然同一の觀を呈したのである。舞臺の後方に左右の扉を有することは貴紳の邸宅に於ける饗宴室に髣髴してゐる、又事實 Gray's Inn 或は Middle Temple の食堂で Shakespeare 劇の上演せられたこともある。其等の形式が

次第に混和せられて エリザベス朝の劇場を形作つたものに相違ない。

因みに劇場構造の細部に關する記録としては僅かに Fortune 座に關する請負契約が残つてゐるのみで、これは Globe 座等に比すると遙かに小規模で、八十呎四方の方形建物である。内部は五十五呎四方、舞臺は間口四十三呎、土間の中央以上まで突出する。棧敷は第一階の高さは明記されてゐないが、第二階十二呎、第三階十一呎、其上部は九呎、奥行は第一階十二呎半、二三階はそれより十呎だけ前方に突き出で、屋根は瓦葺、基礎は地上一呎だけ煉瓦で積み上げ、樂屋も瓦葺、硝子窓となつてゐる。總工費は當時の金で四百四十磅と見積つてゐる。

かゝる形式は我國の能舞臺を聯想せしめるが、エリザベス朝の劇場は演技の精神から見ても、全體の空氣から云つても寧ろ我が江戸期の劇場に髣髴たるものがある。坪内博士の親炙式劇場、隔離式劇場の區別に従へば、これこそ最も親炙式の意味に叶ふもので、近世の老大な隔離式劇場は宵壤も嘗ならざる差別がある。後者に於いては舞臺は觀衆と絶縁せられ、或は orchestra 或は curtain 或は額縁式の frame によつて全然見物席と區劃せられ、一の繪畫的效果を與へるものである。多數の觀客は著しい遠方から又は極めて高い座席から、オペラグラスなどの援けをかりて眺めるのであるから、必然的に一の tableau として映畫劇の如き印象を受けざるを得ない。即ち二つの擴がりの内に展開する平面的 illusion を得るに止まる。然るにエリザベス朝の舞臺では全然開け放しの儘で、幕合もなく連續的に演技が進行する。無論臺景を限る額縁も無い上に、三方、場合によつては四方に觀客を控へてゐる小劇場であるから、舞臺の價が空間的に擴大せられたることになり、三の擴がりをもつた立體的演出を可能ならしめる。舞臺は fore stage, middle stage, back stage の區別が立ち、これに inner stage, balcony

を加へると五つの plane 上で劇が進行すると云つてよい。此點は舞臺こそ張り出してないが、花道といふ特殊な工風によつて、見物席を跨がり舞臺を擴張し、劇場内全部を一の舞臺に化すところの江戸期劇場と同巧異曲といふべきである。

劇場内に科白の微妙な抑揚が自由に徹底することが出来るほど比較的手狭であつたので、近代式大劇場に於て見るやうな無理な發聲上の誇張をする必要がなかつた。幕合が無かつた關係もあるが二時間有半で演了するためには、俳優が科白に練達してゐなければならなかつた。又當時の舞臺は背景も照明装置もない原始的なものであつた丈、觀客の想像に訴へるには全然演技の魅力によるの外はない。されば elocution は彼等の特技として最大の長所たる榮譽を擅まにするに至つたのである。

簡素な舞臺と著しい對照をなすものは俳優の衣裳が思ひ切つて絢爛であつたことである。此點も我能樂の衣裳の華麗であるのに類似してゐる。觀衆の注意はたたさへ俳優に集注される上に、其扮装にかゝる衣裳を用ひるために、一層演技が強調せられた。Henslowe の日記に下袴一着に四磅十四志、天鵝絨上着に十六磅等の書き入れがあるし、或俳優は外套に二十磅十志を投じたを傳へたる、以て其一斑が窺はれるのである。

近代式大劇場に對する反動として最近 intimate theatre, little theatre の運動が擡頭して來たが、これは演劇が觀客に親密接近を加へ、より自然な、より delicate な藝術を産まんとするものである。畢竟これはエリザベス朝の劇壇が夙に實現したところのものである。空間的に接近することは心理的に接近することであつて、舞臺上の情緒は直ちに觀客の情緒となり、力強い同感を喚び起す。此點は近代式大舞臺に到底望むべからざること、其處には場面の變化の興味を主とする筋立、situation 本位のものとなり、性格の發展を動的に表はす代りに、類型的な性格の羅列に陥り、さうし